

でに簡単ではあるが前回報告を行ったので、本報告では「アサーティブネス（自己主張）」と「セルフエスティーム（自尊心）」について述べたい。さらに、同質問票を用いて行った大学生活に関する質問の結果についても併せて報告する。

1-1. セルフエスティーム（自尊心）

セルフエスティーム（自尊心）については、自分に対する自信について問う8問について、4段階（1＝全くあてはまらない～4＝よくあてはまる）で回答してもらった。調査には、調査者の教える明治大学情報コミュニケーション学部の学生に参加してもらった（男209名、女188名、平均年齢19.1歳）。

全体として点数が低い傾向が見られた。各質問の方向性が異なるため、データ上変換処理を行っており、点数が低いほど「自信がない」傾向を示すよう表示した（表1参照）。このため、本調査結果からは、学生たちは自分についての自信が高くない傾向が読み取れる。

表1 セルフエスティーム（自尊心）

	平均値（標準偏差）
私は、すくなくとも他の人たちと同様、価値のある人間である。	2.10 (0.77)
私は、「負け組み」と感じることが多い。	2.61 (0.93)
私は、他の人と同じくらい上手に、物事に取り組むことができる。	2.43 (0.81)
私にはあまり自慢できる点がない。	2.36 (0.88)
私は自分自身に肯定的（ポジティブ）な感情を持っている。	2.37 (0.94)
全体として、私は自分に満足している。	2.59 (0.88)
自分をもっと尊敬できればいいのと思う。	2.02 (0.95)
時々自分を無能と感ずることがある。	2.09 (0.92)

日本人のコミュニケーション能力定義の試みと大学におけるコミュニケーション教育への応用

Defining Communication Competence of
Japanese and Its Application to Communication
Education at College Level

根橋 玲子

NEHASHI Reiko

本調査の目的のひとつは、学生たちが自身のコミュニケーションをどのようにとらえているのかを把握することにある。本調査では主にコミュニケーションを、「アサーティブネス（自己主張）」、「自己開示」、「セルフエスティーム（自尊心）」の3側面からとらえ、これらの側面について、学生たちが自身のコミュニケーションをどのように認識しているのかを質問票によって調べた。これら3側面のうち、「自己開示」についてす

1-2. アサーティブネス（自己主張）

アサーティブネス（自己主張）については、自分が普段どのくらい自分の意見や考えを周りに伝えているのかについて問う11問について、4段階（1＝全くあてはまらない～4＝よくあてはまる）で回答してもらった。

「自己主張」という日本語は、ネガティブなイメージでとらえられがちであるが、英語での「assertiveness」は、自己をゴリ押しするのではなく、自分の考えや気持ち伝える、「自己表現」を意味する（岩船・渋谷、1999）。自己表現に関する11の質問からは、因子分析の結果、「対人積極性」、「感情の授受」、「自己評価」、「依頼と拒否」の4つの因子が抽出された（表2参照）。

表2 アサーティブネス（自己主張）因子分析

	第1因子 (対人積極性)	第2因子 (感情の授受)	第3因子 (自己評価)	第4因子 (依頼と拒否)
話をしている人に質問することがある	0.71	0.15	0.05	-0.16
間違っていると思うことがあれば反対意見を述べる	0.70	-0.02	-0.34	0.03
指図したり、その場を仕切るのが好きなほうだ	0.60	-0.14	-0.20	-0.10
好きな人には普通気持ちは伝える	0.59	-0.30	0.18	0.11
人を責めたり責めるのは苦手だ	0.03	0.77	0.07	-0.03
人に言われると何といてこたえたらいいかわからない	-0.01	0.66	0.18	0.13
他の人から話しかけられるまで自分からは話さない	-0.25	0.64	0.01	0.25
他人に「あなたにはできない」と言われると簡単に諦めてしまうところがある	-0.06	0.07	0.82	0.01
自分の意見はそれほど重要ではないと感じることが時々ある	-0.11	0.15	0.73	0.20
友達に頼みにダメとは言いきく	0.09	0.01	0.09	0.83
友達に頼みごとはいきく	-0.02	0.23	0.01	0.76
固有値	2.63	1.43	1.19	1.08
累積寄与率 (%)	23.94	36.97	47.80	57.61

主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

それぞれの因子の平均値を見ると、4段階のほぼ真ん中であることがわかる（点数が高いほうがアサーティブネス度が高いことを意味する）。

因子（人数）	平均値（標準偏差）
対人積極性（384）	2.32（0.59）
感情の授受（395）	2.51（0.65）
自己評価（395）	2.64（0.74）
依頼と拒否（398）	2.38（0.70）

2. 大学生活に関する質問

ここでは、質問票により大学生活について尋ねたいくつかの質問の回答を簡単に報告したい。

まず大学が学生たちにとってどのような場所であるのかを尋ねた質問については、最も回答が多かったのは「自分探しの場所」（ $n=138$, 36.6%）、次いで「勉強する場所」と「なんとなく行く場所」（ $n=61$, 16.2%）、「出会いの場所」（ $n=49$, 13.0%）、「遊ぶ場所」（ $n=34$, 9.0%）という結果であった。「勉強する場所」であるという認識は、2番目に多く挙げられてはいるものの、これを選んだ者の数は全体からみれば決して多くはなく、実際別の質問で「勉強をどのくらいするか（時間）」について尋ねたところ、7割の学生が平日および休日ともにほとんど勉強しないことがわかった。

次に「誰と、何をしているときに一番楽しく感じるか」という質問については、「友人との会話や遊び」（ $n=171$, 45.2%）、「趣味」（ $n=54$, 14.3%）、「サークル活動」（ $n=49$, 13.0%）、「恋人とのコミュニケーション」（ $n=40$, 10.6%）が続き、「家族との団楽」（ $n=6$, 1.6%）や「勉強」（ $n=2$, 0.5%）といった回答はごくわずかであった。このように、大学生の生活は勉強を

中心にしたものではなく、友人関係が重要な役割を担っていることがわかる。そこで次に、学生たちのコミュニケーション志向に関する質問の分析を試みた（表3、4参照）。

表3 コミュニケーション志向

	第1因子(多様な人とのコミュニケーション志向)	第2因子(相手に話を合わせる傾向)	第3因子(仲間と固まる傾向)
年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい	0.75	0.09	-0.16
友達が悪いことをしたときに注意する	0.71	-0.09	0.11
違う意見を持った人とも仲良くなれる	0.70	-0.21	0.02
友達と話が合わないと感じる	-0.10	0.88	0.07
仲間はすれにされないように話をあわせる	-0.06	0.85	0.20
友だちといつも一緒にいたい	0.18	0.06	0.86
グループの仲間同士で固まっていたい	-0.21	0.22	0.77
固有値	2.12	1.51	1.03
累積寄与率 (%)	30.29	51.86	66.51

主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

コミュニケーション志向に関する質問からは、「多様な人とのコミュニケーション」、「相手に話を合わせる傾向」、「仲間と固まる傾向」の3つの因子が抽出された。そこで、それぞれの因子項目の素点の平均値を用いて、コミュニケーション志向により、大学生活への満足度がどのように異なるのかを分析したところ、表4にあるように、大学生活への満足度が高い人は、多様な人とのコミュニケーション志向が強く、また相手に話を合わせる傾向が弱いことがわかった。

表4 コミュニケーション志向と大学生活への満足度

	平均値（標準偏差）		
	多様な人とのコミュニケーション志向	相手に話を合わせる傾向	仲間と固まる傾向
とても満足	3.3 (0.5)	2.0 (0.7)	2.4 (0.8)
まあまあ満足	3.0 (0.5)	2.4 (0.7)	2.6 (0.7)
あまり満足でない	2.9 (0.5)	2.4 (0.6)	2.6 (0.7)
満足でない	2.8 (0.7)	2.3 (1.0)	2.6 (1.0)
F値	3.7**	3.5**	1.2

** = $p < 0.01$

最終報告では、残りの質問を含め質問票による調査を全体的に分析し、さらに授業内で実践を行ったコミュニケーション教育の試みについて報告する。

引用文献

岩船展子・渋谷武子（1999）『アサーティブ：自分も相手も尊重するハッピーコミュニケーション』PHP研